

第22回むつ市総合教育会議議事録

開催日時： 令和4年12月1日（16：00～17：45）

開催場所： 下北文化会館 大集会室

出席者： 宮下 宗一郎 むつ市長
阿部 謙一 教育長
田中 志昌 教育委員
納谷 順子 教育委員
黒木 和之 教育委員

事務局 教育委員会

伊藤	教育部長
鷲岳	政策推進監(生涯学習課長)
祐川	副理事(学校教育課長)
櫻井	副理事(図書館長)
木村	中央公民館長
金浜	川内公民館長
二本柳	大畑公民館長
山崎	脇野沢公民館長
渡部	総務課主幹
谷川	生涯学習課主幹
坂本	生涯学習課主幹
関	総務課主任
畑井	総務課主任
井戸向	図書館主任

1. 開会

事務局： 時間となりました。ただ今から、第 2 回むつ市総合教育会議、教育講演会、平田オリザ氏講演会を開催いたします。

講師には、芸術文化観光専門職大学学長であります、平田オリザ氏をお迎えし、「地域課題を解決するための学校づくり」と題して講演いただきます。

講演に入ります前に、むつ市総合教育会議議長であります、むつ市長 宮下宗一郎が御挨拶いたします。

それでは、宮下市長お願いいたします。

【宮下市長あいさつ】

事務局： 講演に入ります前に、講師並びにむつ市総合教育会議のメンバーをご紹介します。本日、講演をいただきます、芸術文化観光専門職大学学長であります、平田オリザ様です。本会議の議長であります、むつ市長宮下宗一郎です。

むつ市教育委員会教育長 阿部謙一です。

むつ市教育委員会教育委員であります、田中志昌委員です。

同じく教育委員であります、納谷順子委員です。

同じく教育委員であります黒木和之委員です。

なお、長岡俊成教育委員は、都合により欠席となっております。

以上 6 名で構成されます。

それでは、本日の講師であります、平田オリザ氏をご紹介します。

【講師紹介】

2. 講演

3 日前に川内中学校に寄せていただきました

て、1 限から 6 限までがっちり授業をさせていただいて、講演会をさせていただいて 2 年前にもちょっと声かけていただいて、いろんなところでちょっとバラバラに喋ってきたものですから、ちょっと重複するところもあるかもしれませんが、今日は特に地域と教育ということで考えていきたいと思います。もちろん、学校は子供の為にあるんですけども、行政も強く関わるようになってきた。やはり、少子化がこれだけ厳しくなって、学校が学校だけのことを考えていたのでは共倒れになってしまうので、一緒に考えましょうっていうことだと思うので、そういう視点で今日の話も聞いていただければと思います。

少し自己紹介のスライドも持ってきました。これは、私、普段は演劇を作るのが仕事で。夜はサッカーのワールドカップのスペイン戦があります。これは、2002年のサッカーのワールドカップの記念事業で、日本と韓国の両方の国立劇場で合同で作った作品です。日本の俳優さん 6 人と韓国の俳優 5 人出させていただいて、日韓でイレブンを作って、両国で大きな賞をいただくことになる。

これは、東京ノートといい、今世界 14 か国ぐらいに翻訳され、世界中で上演している作品の日韓版ですね。手前の二人が韓国で、奥の二人は日本の俳優。これは、フランス語版ですね。これ多言語演劇とか多国籍の演劇を作ってきたんですけど、皆さんもドライブマイカーという映画をご覧になった方もいらっしゃると思って、この二人出ますので、これから見る方、ちょっと注目していただきたいんですけども、こういった多国籍の演劇をあの作ってきました。

あと、大阪大学に長く居た、大阪大学のロボットを使った演劇とかですね、これアンドロイド、こっちはアメリカ人の肖像。マツコ絶賛ご覧になったことがあるかもしれない。テレビで。もらえなかったから、あれを作った教授はお皿を持っています。この人、どの

ぐらい変化したかと。自分にそっくりのアンドロイドを作って有名になったんですけど、アンドロイドは年取らないですよ。自分はどんどん年取ってちゃいますね。だんだん離れてちゃいますね。でどうしたかって自分のほうが整形手術しました。こちらは300万で、こっちは30万だった。あんまり意味ないですね。本当に自分とロボットの区別がついてない方なんですけど、彼と一緒に10年以上色んな作品を作って、世界中を回っていた。

これはオペラなんです。ドイツの国立歌劇場で作ったオペラで、これは福島が舞台になって、防護服着てお墓参りに行くんですけれど。

ご紹介がありました、昨年ですね、4月に開学しました、芸術文化観光専門職大学、県立の大学になります。ここの初代学長に就任をしました。あらかじめ申し上げておきます。あとでも時間があれば少しご説明しますが、私は今、この兵庫県北の但馬地方というところの豊岡市っていうところに住んでいます。

これがむつ市と様々な形で、共通点がありまして、豊岡市が人口が75,000人、但馬地方が全体で周辺人口が16万人、但馬は東京都と同じ面積。それから豊岡市が東京都23区と同じ面積で、1市4町が合併したので、こちらと同じように兵庫県で最大の面積を持った市ですね。相当過疎が進んでいる。

で、但馬地方はですね、東京都と同じ面積がありながら、4年生大学がなかったんですね。大学の誘致、悲願だったんですけども、専門職大学という新しい制度ができて、これを利用すればできるんじゃないかということで、3市2町の首長が県に請願をして作ったのが、この新しい大学になります。まさに、地域課題を解決するための大学です。このあと、紹介したいと思います。

それ以外にですね、国語の教科書を作るお手伝いをずっとしてきたので、今もだいたい

年間30校から40校ぐらいはこうやって小中学校回って授業をしています。今回は、3日前に川内中学校で1時限から6時限まで。その後講演会をさせて頂いて、むつ市に泊まって、翌日は青い森鉄道で八戸まで行きまして。昨日の午後と今日の午前中は八戸東高校で授業をして、それから八戸東高校の全校生徒に1時間半講演をして、今日、またこちらに戻ってきました。ちょっと青森県、人使い荒いんじゃないのと思ってます。はい、よろしく願いいたします。で、大学でもこのワークショップ型の授業をしています。八戸東高校でもこういった事業毎年。八戸東高校にはご存知かと思いますが表現科という、演劇とダンスを学べる青森県内唯一の課程を持ってまして、そこの立ち上げからお手伝いをしてきましたので、20年間、毎年八戸には来ております。

それでですね、大学では文化政策とかまちづくりとかを教えるのも、もう一つの仕事なんでこういう講演会もよく呼ばれるんですが、最近ですね、呼ばれると、ちょっと、人口減少についてちょっと触れてくださいみたいな依頼がすごく多いですね。地方創生の予算で呼んでるんで、なんかちょっと触れてください。劇作家に地方の人口減少について聞くようになったら、この国もいよいよ危ないかと思っているんです。全然関係ないですから。

ただ、劇作家は目の前のお客様を楽しませなきゃいけないって強迫観念があるので、考えたわけですね。その一つがですね、スキー人口の減少です。これ、青森県にとっても深刻な問題だと思うんですけども、まあどのぐらい減ったかということですね、こんなに減ってるんですね。平成の最初の20年間で3分の1以下になってしまいます。その後は増えてます。それでも半減ですね。色んな理由が言われます。もちろん趣味の多様化ですね、93年になってスマホどころかインターネットもまだない時代ですので、それから、意外

に深刻なのは、若者たちの可処分所得の減少です。今、東京の学生たちは車持ってないので。それから一説によると、寒いとこ行かなくなっただって説もあるんですけど、これはスキーだけじゃなくて、テニスも海水浴もみんな減ってるんで。やっぱり一番の理由は、この若者人口そのものの減少です。1,000万人減っているんですね。これも大変なことだと思うんですが。そうは言っても統計的に見ると2割減です。

こちら半減ですね。やっぱり。激減と言っていいと思うんですね。どんな統計学者、社会学者も観光学者も、若者人口が減ったからスキー人口が減ったと。これ事実だと思うんです。若者人口が減ったからスキー人口が減る。ただ、私たち劇作家は、ちょっとひねくれたものの見方をするのが仕事なので、ちょっと違うんじゃないの？。若者人口が減ったからスキー人口減ったんじゃないって、スキー人口減ったから若者人口が減ったんじゃないの？もう一回言いますよ。スキー人口が減ったので若者人口が減ったじゃん。スキーはですね、私たち80年代までに大学生生活を送った人間にとって、スキーはですね、20代の男性が女性を一泊旅行に誘える最も合法的な手段ですね。これなくなったら少子化になるだろうってことで？別に性的なことを言っているわけだけでなく、出会いの場なくなっちゃったってこと。これテニスも海水浴もみんな減ってます。まちづくりという視点で言えば、街の中にジャズ喫茶とかライブハウスとか雰囲気のある古本屋さんとか画廊とか、写真館とか全部なくして行って、行政が慣れない婚活パーティーしてるってのが今の現状です。恋が育たないですよ。そういった出会いがもう少なくなっているんじゃないかということですよ。

霞が関が考えている人口減少対策はこれですよ。ライフワークバランス。一番象徴的なのは待機児童の解消です。しかし、待機児

童、ほとんどの自治体で解消されています。今も残ってる百ぐらいの自治体ですね。もちろんそれはそれで大変なことなんですけど、残りの1600の自治体の子供が欲しくて欲しくてたまらない自治体です。そこでの問題は非婚化、晩婚化です。もちろんですね、恋愛も結婚も出産も子育ても全部個人の自由。内面の問題です。だからそんなこと劇作家に聞くなよ。私たちは内面の自由の方を扱ってきた。行政がそんな事に関与するなんていうのを扱ってきたので。ただ、これほどに少子化が進んでしまうと社会が壊れてしまうので、行政としても何か手が打たなきゃいけない。でもこれは内面の問題なので、政策は限られます。

首に縄付けて子供生めというわけにはいかないですよ。今、どの自治体さんも出産奨励金とかで30万、50万、3年目から100万とか出している自治体もあります。

でも、100万もらえるから子供産むっていう方はいないですよ。じゃあ、これ1,000万だぜっていう人もいます。1,000万だったら生むかもしれない。だけどこれ、そうしたらですね。おそらく深刻な幼児虐待とか起こります。だってお金の為に産みました。お金では解決しないですよ。マインドの問題ですね。統計だけからいえば、結婚してくれさえすれば、子供は増える。少子化が止まる。あるいはフランスのように結婚しなくても安心して子供が産めるような社会をつくっていく。いずれにしても、パートナーは必要です。出会いが必要です。それ以外に少子化を解決する方法はないんですね。

あの東京だけがちょっと例外で、東京は特殊出生率が非常に低いんですね。1.1とか。他は1.3とか1.4。恐らくむつ市は1.7とか1.8くらいあるんじゃないかと思うんです。

東京だけは2人目が産めないんですよ。あまりに家賃とかが高いから。これはまあ、世

界中の傾向で、ご承知のように韓国ですね。特殊指数、全国で0.8とか危機的な状態になってます。先進国で最下位ですね。ソウルは0.4とか0.5です。もうだから産まない人の方が多くなっちゃってる。産んでも一人しか産めません。ソウルの場合は。教育費がかかり過ぎるから。いずれにしても、地方の場合には問題です。

若い女性たちは地方に、その若い女性は口をそろえて出会いの場が少ないという。そして、もう一つ意外と深刻なのが、高校での階層化です。高校の数が少ないと、そこで偏差値で輪切りになって、人生が決まったようになってしまう。例えば、私が住んでいる豊岡市に豊岡高校というトップ校があります。ここは、東大や京大にも毎年、1人か2人は行くというような地方の典型的なトップ校です。で、今年3月、198人の卒業生が出ました。198人のうち194人が但馬から外に出ました。4人のうち残りの2人はうちの大学に来ていますね。あとの2人はもしかしたら公務員とかになったかもしれないですけど、なにかの精神的な理由で出られない。大体それが地方の進学校の現状で外に出る学校と半分残る学校と全部残る学校に輪切りにされてしまう。

だから出会いの場がますます少なくなるし、特に日本の場合、残念ながら男性は自分より学歴の高い女性と結婚しない傾向にあります。

だから地域のトップ校にいた女の子は、そこで将来のパートナーを見つけるか、やっぱり都会に出てパートナーを見つけるしかなくなってしまう。全体の統計としては。

もう一つの問題はですね、私、大学の教員になって20数年なんですけど、自分のゼミの学生で、ふるさとは、田舎は、職がないから帰らないと言う学生に会ったことがないです。現実には。皆さん来いよ、来いよって言うんですけど、来いよは当たり前じゃないですか。地方の方が若者人口の減少が極端に激

しいから。人手不足になっちゃってるんですよ。それでも戻ってこない。学生たちは口をそろえて。田舎がつまらないというふうに言います。面白くないと言います。東京、大阪でこんな刺激的な毎日を過ごしてしまったら、もう戻れないと言いますね。だから僕はよく首長さん達には面白いの作ればいいじゃないですかと言ってきます。あるいは、帰りたくなるまち。そして、出会いがあるまち。この帰りたくなるまちを作るというのは、単なるスローガンの題目ではありません。ここが最大のポイントです。なぜなら、日本の人口減少対策、地方創生政策は、いまだに高卒男子を囲い込む政策なんですね。昭和30年代40年代、青森、下北半島、特にそうですよ。要するに出稼ぎ集団就職をなくすことが最大の課題だったんです。だから工場を誘致し、公共事業を引っ張ってくれば、出稼ぎ、集団就職行かなくて済む。で、実際にこれ成功したわけですよ。地方は豊かになります。これ、おそらく昭和の時代に自民党長期政権が行った最も成功した政策でした。田中角栄だから。ただし、これがあまりに成功してしまったために、平成の30年間ほとんど各自治体が思考停止に陥ってしまう。そのままの政策を続ける。その間に何が起きたかという、専門学校を含めた高等教育機関への大学への進学率の急上昇です。そして何よりも各自治体が見誤った、あるいは見てみないふりをしてきたのは、90年代以降の女性の4年生大学への進学率の急上昇。ふと気がつくと、もう女性が戻ってこないまちになっている。私とその豊岡市、18歳の7割が1回外に出ます。相当頑張っていて、男性は5割戻ってきます。20代の回帰率があり、5割戻ってきます。女性25%しか戻って来ません。残念です。これ、少子化になりますよね。男だけで絶対子供産めない。18歳の男の子を留めておけば、地域に留めておけば、女子はせいぜい行って短大で、信用金庫とか事務職に

就職して、コンピューターがなかった時代、電卓で計算してた時代です。これ、僕、人間エクセルと呼んでいるんですけど。大量の若くて元気で給料の安い女子が地元にも必要とされてたんです。その人たちに頑張ってもらって、23、4で寿退社して子供をたくさん産んでもらう。男を留めておけば、女性だと、もともと地元残ってるから結婚して子供産んでくれるだろうという、昭和の男性目線の政策を今も続いちゃっているんですね、これが。ここに最大の問題がある。18歳の男の子に地元にも就職。18歳の進学を考えてない男の子に、地元にも就職があるから残らないという問いかけと、22歳の少なくとも仙台や東京や京都で楽しい生活をする4年間、最低でも4年間楽しい生活を過ごしてきた22歳の男女に、それでもむつ市に戻ってきてくれますか？という問いかけは、問いかけの質が全く違うでしょう。この質の違いについて、行政は全く気がついていなかった。本当に豊岡市とむつ市似ててですね、この店舗、大体並びが似てます。大体今何でもあるじゃないですか。吉野家もあるしね。スーツの紳士服のなんかちゃん全部あるじゃないですか。で、うちの豊岡の高校生たちに、君何が欲しい？って聞くとスターバックス。それからセブンイレブン。あと、イオン。この3つともないです。大人は、ローソンとファミマあるんだから、セブンイレブン行かないだろうと思うんですけど、子供たちは無いものが欲しい。

豊岡は、城崎温泉でものすごい賑わって温泉街があるので、スターバックスよりもおしゃれなカフェ全然あるんですよ。でもやっぱり、高校生スターバックスほしいんです。最大の問題は、高校生は車の運転できないので、田舎は不便だっていう印象のまま外に出てしまう。ずっとその印象なんです。私たち、大人は車社会だから、そんなにも不便無いんですよ。特に、私が住んでいる所は、特急の

止まるJRの駅まで歩いて4分、高速のインターまで車で、空港まで車で10分というところで全く不便もない。そして、買い物全部アマゾンとかで出来る。私55年、東京に居て移住しましたが、何の不便もないです。でも、子供たちは不便不便で何も無い田舎という印象のまま外に出て、東京や京都で楽しい大学生活を送る。ここ変えてからです。だから早くあの自動運転の技術が早くできたら、地方は特許を取って16歳から免許取れるようにすればいいんです。そうしたら、もっともっと自由になるから、もっともっと出会いの場が増える。若者達の出会いの場を奪っておいて、で、戻って来いってのは無理。

今ですね、大体東京で暮らしている子育て世代4割以上、コロナ以前でも4割以上が地方移住を考えたというアンケート調査があります。今も6割7割になってると思うんです。それでも戻ってこないです。考えたことあっても戻って来ない。私たちは、来る理由ばかり考えるんじゃなくて、来ない理由を考えなきゃいけないと。多くの人たちは自分に合った仕事ない。地方は自分に合った仕事がないというふうに。やっぱりUターン者とか、特にIターンJターン組ではやっぱり起業する方多いですよ。おしゃれなカフェとかそういうのを作るのが、だいたいこういう方だから、こういう方々のやっぱり仕事の場所を作っていかなきゃいけない。特に女性に合った仕事の場所がないんですよ。なかなかね。これはどうやって作っていくか、大きな課題です。しかし、それ以外に来ない理由は、この三つです。教育と医療、文化です。医療はね、もう相当どの地域でも良くなってきました。先端的な医療が受けられるようになってきました。問題は教育ですね。東京と同じだけの教育水準があるかどうか。そうじゃないと、やっぱり安心して子育て世帯が戻ってきません。それから、文化ですね。これが広い意味での文化です。移住する若い夫婦が当然

下見に何度も来ますよね。Uターン者でも里帰りの度にお盆とかお正月にちょっと見て参ります。移住を考えている人達。当然雇用先探しますよね、それから子育て中だったら保育園、幼稚園とか見学に行きます。あと、どこを見るところですか？意外に見るのが図書館です。図書館に良い本がきちんと揃っているかどうかは、子育て世代にとってすごく重要な要件なんですよね。それから、図書館はそのまちの文化政策の顔なので、やっぱり図書館が貧弱なところにあると戻ってきません。もっと面白いのがスポーツ。スイミングスクールがあるかどうか。スイミングは、英語やピアノ以上に習い事ナンバーワンなんで。でも、こんなこと行政はそれまで考えてなかったんですよね。スイミング、スイミングスクールは民間でやるものだと思ってた。

でも、スポーツ文化施設がないと、やっぱり若い人たちが戻ってきません。

それから食文化、ママ友とパパ友が、保育園に子供を預けた後にちょっと食べれるようなおしゃれなカフェがあるかどうか。スイーツがあるかどうか。できればこうイタリアンレストラン。おしゃれなまちをつくっていかないと、やっぱり若い人たちは戻って来ない。要するにこういった総力戦で若者たちが戻ってきたくるようなまちをつくるってことが大事なんです。その中でも教育っていうのは非常に大きいので、後でまとめて話をしたいと思います。

私自身が大学で教えてるのは、この社会における芸術の役割という、まあ、いろんな役割があるんですね。まず芸術のものから。これは、皆さんが音楽を聴いて、心が慰められたり演劇を見て、映画を見て勇気をもらったり、絵画を見たら心が落ち着いたり、まあそういうものです。

次がですね、コミュニケーション維持のための役割。まあ、これはですね、どんな文化人類学者なんかに聞いてもですね、どんな地

域にも、お祭りとか伝統芸能とかそういうものがあるわけですね。飛ばしちゃいました。芸術そのものの役割についてちょっと考えてください。これ、ここに来てる皆さんってそんなことを経験したことないっていうのはあまりないと思うんですけど、一般市民の方でそれが芸術の役割と認識してない方もいらっしゃるかもしれませんね。例えば、カラオケでストレスを発散する。しかし、そのカラオケはですね、何かの楽器によって演奏され、楽譜によって記録されているわけです。西洋音楽の長い営みの結晶として、大衆芸能とかもある。東日本大震災があった時に、アーティストがたくさん慰問に行きました。当時ですからエグザイルとかね AKB とかが喜ばれたわけですけど。しかし、一番喜ばれたのは、長年歌い継がれてきた唱歌であったり、クラシック音楽だったと言われていました。一方で、2011年3月4月、東京中心とした関東地方で、自粛と呼ばれる芸術活動創作活動の停止が見られました。でも、今、私たちアーティストは作品を作らなくなっちゃったら？100年後、200年後の被災者や難民は何によって慰められるのかっていうことなんです。今、私たちは100年前、200年前に書かれた音楽に感動し、何百年前に描かれた絵画を見て心が落ち着き、それで2、500年前に書かれたギリシャ悲劇をみて、人間とは何かについて考えたりしている。逆に、私たちアーティストは100年後、200年後の地球の裏側の被災者難民のために作品を作っていると言ってもいい。これは、僕は、無形の公共財と言う風に呼んでいます。ただ、これ、行政として考えると難しいわけですね。ダムや道路は間違えることがあっても、一応需要予測っていうのを立てて道路とか作るわけですよね。ただ、現実には百年後にどの技術が人類のために役に立つかわからん。なのでご行政としてお金が出しにくいというところがあります。

次は、コミュニケーション維持のためのあかりですね。これも東日本大震災を例にとるとですね、女川町という原発事故が起きなかった東北電力の原発があるところですね。仙台のちょっと先ですけれども。ここは一番入り江が入り組んでいて、最大40mまで津波が来て、家屋の7割が流され、人口の8%が失われました。

これ、高台移転するしかないんですけど、なかなか合意形成ができないんです。小さな港の集合体は。

この地域はですね、獅子舞がすごく有名なんです。この獅子頭も全部流されてしまいました。港の売店に置いてあったので。これは復興早かったんですね。獅子頭自体を送ってきてくださった自治体もあるし、募金もたくさん集まりました。これ獅子振りと言うんですけど、だいたいゴールデンウィーク前後にやるんですけど、これできなかつたんですね。また、3月から日が浅かったから。だいたい夏休み復活していきます。これ面白いのはですね、この獅子振りが復活した集落から高台移転への合意形成が出来ていくんですね。人間って面白いもんで経済の話だけしても、もっと広い土地じゃないとだめとか。でも、100年、200年続いたお祭り一回復活させるだけで、やっぱり色々あるけど、みんなで移るべとなる。これが芸術。芸能のもう一つの役割です。ある一定年齢以上になると、昔はお祭りにご参加したりしたわけですね。これ、人類学的にイニシエーション、通過儀礼というふうに成人になる為には、ただ単に昔は学校なんかなかったの、それよりもその共同体に入って行くための儀式として芸術芸能っていうのが機能していたということなんです。そして、今時でしたら教育や観光や経済、福祉、医療、こういったものに役立つ。

福祉や医療、何かと思われるかもしれませんが、今ですね、認知症の治療とか予防に、演劇とかダンスすごく注目集めています。そ

れだけではなく、これは善通寺にある、国立小児病院です。もう見るからに建築段階から子供が病院を嫌がらないように工夫されていることがわかりますよね。なんか中身もですね、ホスピタルアートと言って、今、小児病棟を作るときは、もうアーティストが関わり合うことは普通になっている。こういった今までとは違う芸術の関わり方っていうのいろいろ出てきています。今日はですね。教育と観光について、主にお話ししたいと思ってました

私、そういうわけで、本当に全国を回らせていただいて。来週は、また、1回戻ってから北海道に行くんですけど。すごく地方都市の風景が確立化してきたなどこの20年ずっと感じてきました。国道があつてバイパスがあつて、バイパスのおおきなショッピングセンターができて。で、中心市街地がどんどん寂れて言って。私、70年代は79年に始めてアメリカに行ったんですけど、70年代末のアメリカの風景に非常によく似て来たな。という感じがします。白人中産階級は車でショッピングセンターに行つて帰ってくる。中心市街地はどんどんどんどんスラム化していく。日本はここまでひどくはならないんですけど、例えば、空き店舗、空き家にホームレスの片隅ついでしまつたりとか、それから、よくワイドショーで報道されるゴミ屋敷問題です。ああいうのもスラム化の一形態なんです。そういうことがまあ始まって、ただ、これはあのずっとこうだったわけじゃないです。この2、30年で一挙に日本全土に拡大した風景。要するに、消費社会と金融経済が一挙に全国に広がった。昔は地方には地元資本のデパートがあり、地元資本の金融機関があつたんですけど、これがどんどん東京資本グローバル資本に侵食され。多分悪いことばかりじゃないんですね。いいこともあります。要するにどんな地方の人でも安くて良い製品をいつでも手に入れること

ができるようになります。地方豊かになります。でも、その利便性を追求するあまり、私たちは失ってきてしまったものがあるんじゃないかと思いますね。失ってしまったものというのは、この旧市街地が持っていた、経済活動からすると無駄に見えるんだけど、社会活動にとってどうしても必要な機能です。例えば、それはとなりのトトロに出てくるような鎮守の森という空間とか、先ほどの女川町のような神話や伝統芸能の継承。そういう時間や空間を失ってしまった。もうちょっとわかりやすく言うと、商店街が一番最初になくなると。寂れると、床屋さんと銭湯がなくなるといふふうに言われています。私は東京生まれ東京育ちなんですけど、駒場って小さな町の商店街に育った。うちはずね、2件隣が床屋さん。2件とかだと、絶対、そこでしか髪切れないです。バレちゃうから、他で切ると。駒場って、駒場東大前が東大の門前町なんですけど、うちの向いの電気屋さんは東大電気ってすごい名前の電気屋さんで、電気製品はあのやっぱり大きな量販店で買ったほうがいいよとかで、買った方が大画面テレビとか2.5倍ぐらい違いますから。それと違って夜中にこっそり搬入すればいいんですけど、バレちゃうんです。どんなに忙しくても、そこで、東京に居る時は一ヶ月に一回予約して切りました。

55歳まで東京に居たんですけど、その55年間でその床屋以外で切ったのは17回しかありません。数えたんです。留学してた時なんです。その面倒くさいんですけど、でも行くとやっぱり得がたい情報が得られて、あそこ危ないらしいですよとか、あそこちょっと相続税払えなくて引越すってみたいですよとか、個人情報の塊ですからね。昔の床屋さんっていうのはむつ市内だとまだあると思うんですけど、髪切っている人の横で子供がマンガ読んで、その隣でこのおじさんたちいつ仕事してるんだろうと。おじさんが将

棋さしたりしてましたよね。それは明らかに経済活動からすると無駄な存在の店番サボって将棋さしに来てるわけで。そのおじさんたちが子供たちの監視係であり、教育係の役割を果たしていたわけです。これなんかあったんじゃないのって声をかけて。あるいは、駄菓子屋さんに子供が10円玉握りしめて買い物に来るんだけど、ある日1万円札で買いに来たら、やっぱり駄菓子屋のばあさん注意するわけですよ。そういうところでいじめが発見されたり、まあこういったものを無意識のセーフティーネットと読んでください。今、どんな自治体さんも子供の通学時間帯に合わせて犬の散歩してください、みたいな見守り活動をしています。でも昔の商店街の人なかったんです。見るに見られず関係ができていた。しかし、今日はですね、今日の話はね、昔はよかったって話とか昔に帰ろうと言うことではなくて、これを失ってしまったような何かでこれを回復していかなくちゃいけない。ほかの機能で補っていかなくちゃいけないんじゃないか？ 例えば、いじめの問題一つとってもですね、昔からいじめてのはあるわけですね。学校でいじめても、昔の子供達は学校以外にもドラえもんに出てくる原っぱみたいな場所があった。原っぱでもいじめがあるんですね。あのドラえもんのジャイアンみたいなのが、いじめるんですけど。こっちは学年を越えた交流なので、ガキ大将は、自分の子分がいじめられてるってわかると仕返しに行ったりしたわけです。

今の子供たちの社会で、ガキ大将ってことも仕返しってこともないんです。だから学校でちょっといじめられてしまうと逃げ場所がないから、あつけないほどに不登校になったり、引きこもってしまった。要するに、子供にとっても大人にとっても縦走性のない社会というのは行きづらく息苦しい社会だった。でも、原っぱ作れば子供戻ってくるかと言ったら戻って来ないですよ。日本の子供、ど

んな地方の子供でももう塾だ、習い事だ家庭教師だと忙しいですから。そうすると、私たちは現代社会にあった市場原理と折り合いを創って新しい広場、新しい原っぱ作っていく必要があるんじゃない。その一つがこちらのような公共ホールであったり、美術館であったり、音楽ホールであったり、フットサルコートであったり、ミニバスケットのコートであったり、図書館であります。例えば、図書館のこれが非常に重要な場所になっています。ひきこもりの方で、図書館とコンビニならいけるっていう層が、一定数いる。そういう方に来てもらって談話室とかそういう場所増えています。そこにできればカウンセラーとかボランティアの方を配置して、しゃべれるようになったら、今度絵本とか持ってきて、ちょっと子供に読み聞かせでもやってみない？っていうふうに社会参加をやる。これが居場所と出番という考え方です。今までの行政は居場所づくりと出番づくりを別々にやってたんですね。これをつなげていかなきゃいけない。つなげる場所としてこういった公共文化施設が機能するっていうことなんです。居場所だけではだめなんですね。居場所だけだとまた引きこもって戻っちゃうんです。そうじゃなくて社会にとってあなたは必要な人間ですよということを、子供たち、若者たちに実感してもらわなきゃいけない。この自己有用感というふうに。かつては自己肯定感という言葉をよく使ったんですが、最近はさらに踏み込んで自己有用感、自分が有用な存在であるということを実感させることが大事になってきている。

さて、そのためにはですね、行政としていろんなものを用意して、そこに参加してもらうような仕組みを作らなくてははいけません。しかし、小さな自治体がですね、そのいろんなものを用意できないので、NPOとかの力も借りて、どうにかしていろいろなメニューを作っていく。今回むつ市さんも中学校の部

活動とか外付けして活性化して、これまさにそういうことです。で、その時に大事なのはですね、誰かが何かに参加している。みんなが一つの事に参加するんじゃないで、誰かが何かに参加する。今までの日本の共同体という、全員で田植えして、全員で草刈りして、全員で稲刈りしないと、米は収量が上がらないですね。麦は家族経営できるんですけど、米は集団で頑張んなきゃ。だから私たちは強固な共同体を作っていく。でも、夏は盆踊りだ、秋はまつりだ、冬は餅つきだ、春はだとか、もう全部の行事に参加させられるような強固な共同体にはうんざり。だからみんな都会の名声に憧れて外に出て行ってしまふ。ただですね、どんなアンケート調査を見ても、高度な芸術文化活動、スポーツ、環境保護運動、ボランティア活動、そういった自分が積極的に参加したいと思うアクティビティには、大体人々は車で30分圏内ならば、ストレスなく移動すると言われていています。なので、ぎゅっと強固の共同体作るんじゃないで、ちょっと緩めて、誰でも参加可能なアクティビティをたくさん用意する。これは、僕は誰もが誰をも知っている強固な共同体から、誰かが誰かを知っている緩やかなネットワーク社会に日本社会を編み変えていく。その編み目の接点に音楽があつて、美術があつたり、演劇があつたり、フットサルがあつたり、農作業体験があつたり、読み聞かせがあつたりすることです。なんでもいいから何かに参加してもらって社会につながっているということです。

これをちょっと一番先進的な例はですね、ヨーロッパの多くの美術館博物館とプレスプロジェクトということで、これは、ホームレスの方に月に一回シャワー浴びてもらって、集めた服に着替えてもらって、コンサートとか美術とか、スポーツ観戦に招待する。先進国のホームレスは生まれつきホームレスなわけではないので、何かの理由でドロップアウト

トしてしまった方たちなので、その芸術、スポーツに触れたりすることで、生きる気力を取り戻し、労働力を取り戻してもらえば、これもすごい安上りな方です。

これは、むつ市の方ではちょっと遠いイメージかもしれませんが、こういう事例があります。私は東京でずっと30年近く、小さな劇場を経営してきたんですけども、うちの劇場はもう20年ほど前から、失業保険、雇用保険受給者の失業した方への大幅な割引を実施しています。これ、ヨーロッパの美術館とかホールでは何処でもやっている政策です。日本でも一般料金があって学割があって高齢者割引やって、障害者割引までありますよ。ヨーロッパその下に失業者割引というのがあるんです。日本はどちらかというと逆の政策をしてきちゃったんです。失業した方が、平日の広場に劇場映画館に来たら求職活動を行っていると言って、これ切っちゃ政策をしてきた。これをね、百歩譲れば理由があったんだと思うんです。高度経済成長の時代だったら、景気変動の波があっても半年も我慢すれば、みんなが望む職につけたから。でも今は、職があっても自分に合った仕事が無いってことが問題なわけですよ。例えば、霞が関の悪口ばかりして怒られるかもしれませんね。例えば、製造業が厳しかったら、介護の人手足りないから、介護にたくさん移せばいいじゃないかって考えるわけですけど、そうはいかないですよ。日本の産業を支えているんだと誇りを持ってプライドを持って働いてきた方たちが、失職したからといって、翌日からおじいちゃんのおしり拭くってというのはないわけです。人間心がありますから。実際にデンマークとか北欧の就労支援っていうのは、最大3年ぐらいまで失業保険延長できます。本当にですね、最初は演劇、アナウンスのワークショップとか受けるんです。あるいは、笑って活動とかして、人の笑顔が自分の幸福につながるような体験をたくさんさせてから

就労支援に入る。今の日本の就労支援でもEXCELとWORDできないと就職できませんよね。

それから刑務所の受刑者にも一生懸命手に職をつければ生きていける。マインドが変わってないんですよ、工業立国の時代から。そうじゃなくて気持ちを変えていかなきゃいけないんで、サービス業についていただくために、そこを変えていかなきゃいけない。製造業の方が失職すると、真面目だからみんなハローワーク通うわけです。でもなかなか自分に合った仕事がない。そうすると、まさに自分が社会に必要とされていない自己有用感がなくなってしまう。引きこもってしまう、世間の目も厳しいから。

いまの日本社会の大きな問題の一つが中高年の男性のひきこもり。そして孤独死、孤立死ですよ。こういう話を15年位してきたんですが、相当早い段階でしてきたんですが、最近もっとショッキングなデータが出ました。東京江戸川区だったと思います。ちょっと下町の方ですね。ひきこもりの大規模調査をしたんです。人口比一番多かったのが、40代の女性だった。なんでだと思います。就職氷河期を経験した世代が今40歳になって引きこもっています。要するにその方たちは大学卒業時点でちゃんと4年間大学で勉強してきても、100社受けて100社落ちた人たち。100社受けて100社落ちるってことは、あなたは社会に必要ない、必要ない、必要ないとオープン化されてるようなもんです。当然、精神病む人が一定数出ますよね。で、そのツケが回って、今その世代が一番圧倒的に引きこもりが多い。どれほど人間が自分が社会で必要とされているという感覚が大事だということがわかります。

孤独死、孤立死は、社会全体にとっても大きなリスクとコストになります。まあ、その部屋の匂いが酷いわ、周りの人のショックが大きいわ、その辺周りも住まなくなるし、周

りの人が引っ越して行ってしまいます。そうすると、不動産所有者にとっても個人で負えないようなリスクとコストなんだろう。私たち考え方を変えていかなきゃいけないと思う。失業した方が平日の昼間に劇場に来てくれたら、必要としてるのに劇場来てくれてありがとう。社会と繋がっていてくれてありがとう。その方が社会全体のリスクをホストも軽減されるからね。

生活保護世帯が親子連れで劇場に来てくれます。生活大変なのに来てくれてありがとう。その方が負のスパイラルが再生産されないからね。高く見ていてね。こういった考え方を社会に出す。ソーシャルインフルエンサーの役割で人間孤立させない政策で。日本は長い間地縁血縁型の社会でしたので、これは崩れるわけです。それに変わったのが企業社会だったわけですが、90年代以降、企業がグローバル化する中で、企業は労働者を守ることが全くなくなってしまう。ちょっと振り返ってみると地縁血縁型社会もうない。これが一時流行語になった無縁社会の状態です。日本は特に最後のセーフティーネットである宗教が弱いと言われ、世界の先進国の中で最も人間の孤立しやすい社会なんです。地方でも同じです。逆に地方は孤立しやすいんじゃないかという社会学者もいます。地縁血縁が濃すぎるんで、そこから1回外れてしまうと、もうセーフティーネットがないんですね。でも孤立させてしまうと行政のリスクとコストが増大します。一番わかりやすく行政の方もたくさんいらっしゃると思うので、一番わかりやすい例がさっき例にあげたゴミ屋敷問題です。ゴミ屋敷問題各自治体で情熱って対応してますけど、これを逆に条例作らないと対応できないですよ。だって、家の中にゴミ溜めてるだけです。行政介入できないんです。でも、そこでボヤとか火事が起きたら結局誰がリスクとると思うんです。それは行政が負って、その背後にある納税者、

皆さんがそのリスクとコストを負うと思います。孤立させてしまったらだめなんで、どうにかして社会とつなぎ留めておかなければ。それを繋ぎ留めておく一つの装置として芸術文化に、スポーツや、そして広い意味での社会教育があります。

ちょっと学校教育の話をしてします。これは、小学校6年生の学力テストの国語と算数、上位25%A層と下位層25%D層の家庭環境を比べた表です。一番大きいのはやっぱりこれですね。家には本がたくさんある24.6ポイント、算数でも14.9ポイント。それから子供が小さい頃絵本の読み聞かせをした17.9ポイント。面白いのはこれです。博物館や美術館に連れて行く、15.9ポイント。これは毎日子供に朝食を食べさせている10.4ポイントよりも全然上なんです。子どもの成績を上げたいと思ったら、朝ごはん食べさせるより美術館に連れて行けばいいんです。同じような統計で、アメリカでミュージカルに行くっていうのもある。市長に前お会いした時に、ニューヨーク時代もよく家族でミュージカルに行った話を聞かせていただきましたが、そういうことが実は子どもの成長に反映される。ちょっとショッキングなのがこれです。ほとんど毎日子供に勉強しなさいと言うー5.7ポイント。算数でー7.35ポイントになる。本当にもっとショッキングなのこれなんです。子供の勉強を見て教えている。0.95ポイント、算数でマイナス1.1ポイント。まったく逆効果になっちゃってこと。教えてもだめ。これは大変ですよ。でも、一方でこういうデータもあります。子供が英語や外国の文化に触れるようにしている、17.5ポイント。一方で同じこの統計とったおなじ先生のデータで、幼稚園時代に英語の塾に通わせていた子供の、中学校時代の英語の成績。全く相関性が無いっていうデータもあります。これ、ないわけじゃないですよ。だけど、高いお金払って英語の塾

に行かせても嫌いにしちゃったらマイナスのポイントになるから。相殺されて0になっちゃうんだと思って。

要するに子供たちは好奇心さえ持たせれば自分で勉強してくれるってことです。勉強しなさい、勉強しなさいっていうのが良くないのは、好奇心を奪ってしまうから。好奇心を育てるためにはこういう博物館、美術館、科学館に連れて行くということが大事なんです。さあ、むつ市の場合これなかなか難しいですね。しかし、いくらでも親は、意識する親は、青森でも八戸でもいい美術館、いい美術館もできましたよね。県南でも。そうすると夏休みとか冬休み、子供と一緒に見られるものがあると連れていきますよね。自分のクラシック音楽好きだったら青森八戸どころか仙台でも夏休みとかに行くでしょう。科学館も連れていくでしょう。でも、行かないご家庭はずっと行かないじゃないですか。行けないご家庭もありますよね。経済的な理由とか、ひとり親世帯だったり。だが、行く家庭、行かない家庭でスパイラル状に差が付いてしまう。日本は明治以降150年かけて教育の地域間格差のない素晴らしい国を作っているんです。でも、これが文化の地域間格差と経済格差で二方向に引っ張られて、子供たちの身体的文化資本と言うんですけど、これが、大きく差が出るようになってしまう。しかも、この身体的文化資本が大学入試や就職にも直結する時代になってきたという。ですから、これを解決するためにはですね、文化政策要するに、社会教育、生涯教育と学校教育が連動して子どもたち一人ひとりに身体的文化資本が育つような教育政策に作り変えていかなきゃいけないということなんです。

最後に、生活保護とか雇用保険とか高齢者医療費。これは格差が出てしまった後に、それを解消したり緩和するための政策です。これ事後分配と言います。教育政策や社会経済、文化政策は、格差が出にくくするための政策。

でも、これ行政の方お分かりになると思うんですけど、高齢者医療費とか青天井です。でも、殆どの子供達は小っちゃくて元気なんで、かける予算はそんなに多くないんです。ここにお金を使っておけば、後で高齢者医療費抑制できます。例えば子供のうちに非認知能力、例えば、自制心とか忍耐力とか付けておくと、大人になってからの成人病の発症率低いという、もうこれは確実なデータとして出ています。そりゃそうですね。大人になってからお菓子が我慢できれば成人病にならないです。実際、今、特にこのアングロサクソン系は統計が大好きなので、さまざまな統計を駆使して政策を決定しています。社会的処方箋と言うんですけど、例えば、40代でちょっと検査で気管支系になんか疾患があることがわかる。今は大丈夫だけど、50代60代で何か発病する可能性がある。その時に薬を処方しないで、実際に処方箋に医者が必要です、地元のサークルへ、コーラスサークルに入ってくださいという処方箋を出すんです。コーラスをやってる人とやってない人では肺がんとか気管支系の病気の発症率が違うというデータもはっきり持っているわけ。行政としては、薬にお金出すよりも、地元のコーラスサークルに支援した方が安くなってなればこっち選びますよね、当然。要するに、病気になったり、格差が出たりする前に、それが出にくくするというのがこちらの政策です。ただし、これは結果が出るのに30年50年かかります。アメリカ、ヨーロッパのアングロサクソン系が強い1970年代、80年代からデータ取っているから、今もうはっきりわかってくるんです。ここ日本ちょっと遅れいます。だいたい市長が長くて20年でしょう。議員さんも30年なんですよ。これ50年後ぐらいに結果が出るまで。でも、本来政治の役割ってこっちじゃないですか。

もう一つはね、やっぱり子供たち選挙権持ってないんで、どうしてもこっちに行っちゃ

うんですけど。こっちを充実させなきゃ。要するに事前分配での結果的に行政のコストを軽減し、社会のリスク軽減する。

ちょっと成功例を紹介させてください、これは岡山県の奈義町、人口6,000人の町です。鳥取県との県境にあります。ここはですね、十数年、きめ細かい子育て支援と教育改革を行って、特殊出生率2.81日本一の町です。テレビとかでご覧になったことあるかもしれません。

これはですね、ずっとじゃないです。一旦1.4まで下がっているんですが、去年は2.95速報値で出ました。2点代後半というのは沖縄の離島ぐらいなんですね。奇跡の値と言われています。からくりは簡単です。お隣に津山市で人口10万人の街があって、これも完全な車社会なんで、津山で働く若い夫婦は車で30分経済はどこでも同じなんですね。そうすると、子育てと教育政策のしっかりした奈義町にみんな移り住んで、3人目、4人目を産めると。子育て支援もしっかりしているから。ただ、それだけじゃないです。農村歌舞伎を守ってきたので、小学校3年生、学校で全員歌舞伎を経験します。それから、人口6,000人。町役場の職員80人です。しかし、80人の中に2人、歌舞伎専門官というのがあります。この二人はですね、普段は公民館の貸出業務とかやってるんですけど、歌舞伎のシーズンになると、そこに専念していいことになっています。松竹とかにも研修に行って、すごい本格的。これチケット取れない観光名物にもなっている。見ていただければ分かるように、囃子方も子供たちがやります。それだけではなくてですね、希望すると幼稚園から高校生まで歌舞伎か太鼓どちらかが無料で受けられます。習い事もただです。それだけじゃなくて、6,000人の町なんですけれども、磯崎新建築の美術館と図書館も持っています。これは荒川修さんの作品です。

この隣にちょっと空いてるスペースがあったんで、ここに町でですね、窯焼き。ピザ好きのイタリア人誘致します。いま、2時間長蛇の列。2時間待ちなので、その間に美術館見る。美術館入館者も増えます。自然・アートのまちづくりということで、ほぼ人口減少に歯止めがかかっています。ポイントは、ただ単に教育だけではなくて、広い意味での文化・スポーツなど絡めて複合的なまちづくりをする。そうすると、若い人たちが戻ってきてくれるっていうことなんですね。むつ市とは一つだけ共通点があります。自衛隊があるんですね。税収豊か。特に陸上自衛隊がすごくお金を落とすんですよ。砲弾のなんか演習があって、砲弾一発で10万円ぐらいして市の収入となる。市の職員が、砲弾が始まると、もっと打てとなる。まあ、そういういろんな要素があるんですけど、しかし、やっぱりそこで独自のまちづくりができるかどうかでことが大きいんじゃないかなと思います。ちょっとあの時間になりましたので、本当は観光の話もちょっとしなきゃいけないんですけど、ここで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございます。

司会：平田様、ありがとうございます。皆様もう一度大きな拍手をお願いいたします。

平田先生のご質問はディスカッションの後にお受けしますのでご了承ください。

それでは、ここでディスカッションの準備をさせていただきますので、そのままお待ちください。

3. ディスカッション

事務局： この後の進行は議長であります宮下宗一郎むつ市長にお願いします。

宮下市長： 平田先生ありがとうございます。

大変貴重なご講演というか積極的で、もっとも聞きたいことが、会場の皆さんも我々もあると思いますので、まずですね。それぞれの委員からどちらかと意見じゃなくて、先

生もお客さんも話してもらえない簡潔にご質問して頂ければと思いますので、まずは田中委員からお願いいたします。

田中委員： 今日はずいぶん、大変興味深い、そして非常に理解できるお話だったなというふうに思います。

芸術との関わりということで、色々とどういふ結びつきがあるのかと思ったんですが、お話の内容も非常によくわかりました。

日頃感じていること、例えば子供たちがむつに帰ってこない。そういう時に、祭りが結びつけるようなことを、先ほど講演があったんですけど、むつには田名部まつりという非常に歴史のある祭りがあって、その時確かに若者たちがいっぱい帰ってくると非常に盛り上がり、多分あの中でいろいろと将来の話も出るのではないかと思います。そういうことをもしあの活用できてですね、もっともっと盛り上げられれば、それにより地域との繋がりが、深くなるのかなというふうに思いました。

あと、図書館を活用してひきこもりの解消ということもあったんですが、地域が狭ければますます出づらくなるものだと思うので、そういうふうな形が実現できればなというふうに思います。

最後に、川内の方でお話しされたということで、もし、後でよければどのようなお話を行ったかというのも、あのお話でなかったので、できれば少しお聞きしたいと思います。本当にありがとうございます。

平田氏： そうですね、問題はですね。地域の方が濃すぎるってことが問題で、先ほど申し上げたように、東京の多くの若者たちが地方移民を考えています。それは東京の冷たさに耐えられなくてですね、高層マンション、タワマンとかだとエレベーターで声かけ禁止とかってことがあります。千人も住んでいきますから、誰が知り合いかわからないから、

子どものセキュリティの為に一切声かけ禁止したり、近所付き合いを絶ってしまう。これ明らかに人間としてもおかしいです。近所付き合いとかで子どもたちが育って行くのに。でも一方で、若い地方移住考えている若者たちが来ない理由は、今度は地方は濃すぎるんじゃないかということ。人間関係濃すぎるんじゃないとみんな言う。僕はよくこういう仕事をしているので各自治体の担当者に来てこの話をすると、みんな、え、そんなワガママなっていうふうに言います。どっちかにしてくださいって言っても。本当に若い人たちに帰ってきてもらいたかったら、本当に若い人たちに移住してもらいたかったら、このちょうど良いまちをつくるしかないんです。濃すぎない冷たすぎない。僕は、この濃すぎない、冷たすぎない一つの大きな要素として芸術文化、スポーツがあるんだと。要するに、その町に生まれながら、その共同体に参加するのではなくて、参加好き同士が集まる、演劇好き同士が集まる、音楽好き同士が、趣味嗜好でちょっとずつつながっている。今、PTAも問題になってますよね。その学校に子供通わせてるからPTAに入りなさいってのも無理なんです。それよりは、学校でお父さんもお母さんも色んな趣味持ってらっしゃいますよね。だから昔からのママさんバレーもあって良いんだけど、みんなで映画の鑑賞会やりませんかとか、今日ちょっとみんなでボードゲームやりませんかとか、隠れた趣味の人たくさんいます。それ趣味の会たくさんPTAに作って、その各サークルが年に2、3回予告して会合するとか、そういう風にして行かない限り、多分あらゆる地域の活動無理が来てるんです。その結節点にまあ芸術文化ってのがあるんじゃないか。

宮下市長： ありがとうございます。納谷委員お願いします。

納谷委員： 子供の親として、ずっとあの子供に

対しても、周りのお子さんに対しても、その自己肯定感を持ちなさいって、ずっと言い続けてきたんですけれども、今日、あの先生がおっしゃった自己有用感という、ちょっと目からウロコで、誰もが誰も知ってるんじゃないかって、誰かが誰かを知っているとか、1人でもいいから自分が必要とされるそういう場所を作ることがすごく必要だっていうふうにおっしゃっていて、すごくあの勉強になりましたし、子供に対してもやっぱりあなたはこうしなさい、こうじゃなきゃいけないのよ。いいんだよ、それで。ずっと言い続けてきたんですけれども、自分が必要だ、自分という人間が必要だっていうことをこれから子供たちに伝えていけたらなというふうにすごく思いました。

ほかにもいっぱいあるんですけども、今日のこの事を言いたかったのでお話をさせていただきました。ありがとうございました。

平田氏： 先ほどの川内中学校でどんな話なんですかとも関連するんですけど、演劇の授業をやらせていただいたんですね。小学生に。僕はよく小学校の先生方には、声の小さい子がいたら、大きい声出さなくて良いですよって話をよくします。声が小さい子ですね、声の小さい子っていう役をやらせれば一番うまいんです。あの声が小さいの上手いねっていうと、だんだんその自信持って、大きくなっちゃうんですけど。音楽教育の素晴らしさもあるし、美術教育の素晴らしさもあるんですけど、演劇教育の利点はやっぱりあの役割分担ができています。しやすいってということなんです。しかもその子が言ってくれないと劇が絶対できないようになってるので、一人ひとりがどうしても必要になるっていうのが、これ、ずるい言い方で、音楽とかコーラスとかだとロパクでもどうにか誤魔化せるんですよ。演劇そうはいかないので。そうするとですね、これは実はリーダーシップをとるよう

な子にも重要で、要するにグイグイと人を引っ張っていただけがこれからのリーダーシップではなくて、そういうチームの中で一番弱い子をどう生かすかもリーダーシップなので、そういうリーダーシップも育つんですね。

要するに役割分担、それからシャッフルですね。どうしても今中学校なんか全部1クラスですよ。そうすると、学年で10人とかそういう所だと、その子たちは保育園から中学校までずっとずっと10人なんですよ。でもやっぱり固定しちゃってるわけです。先生からなんか言われても、何をやるのが全部決まっちゃてるんで。それをやっぱり演劇とかでちょっと意図的にシャッフルする必要があるから出てくる。そうしないとずっと川内に育つなら良いんですけど、1回はやっぱり外に出るわけで、その時に苦労するんですよ。だから今のうちからコミュニケーションの力を通していろんな役割を演じてもらうということが演技力が豊富だなと。

宮下市長： ありがとうございます。黒木委員お願いします。

黒木委員： どうもありがとうございました。奈義町の話をして、非常に興味深く伺ったんですけれども、ベッドタウンだと。津山市の。そんなに、大きい？あっ、すいません。知らなかったんです。

奈義町というのは、ベッドタウンで成功したというふうに、ものすごくデフォルメするとそうなってしまうと、むつ市はちょっとこのベッドタウンにもなりづらいっていうのがあってですね、最近私が感じているのは下北半島っていうけれども、房総半島や知多半島とずいぶん違くと。どちらかというとはぼ島じゃないのかと思ったんです。なぜかという、ほとんどアクセスがこの陸路で来ると細い鉞の柄みたいな所を一本走っているだけのもの。第三セクターで青い森鉄道しか

なくて、ほぼ島で、隔絶された状況にあって、これは、その、頑張りはどうすればいいんだろうかっていうのは全然解決策はあんまり思い浮かばないんで、こうされている中に島みたいなどころがありましたでしょうか？

平田氏： 実は先週小豆島に行って、小豆島も相当早い段階から演劇教育の実施をしてくださって。これもすごい理由がはっきりしていて、当時の教育長と首長が保育園から高校まで同級生。それで、二人ともまさに島なので、大学に行ってからとても苦労したと。初めて自分を知らない人にあたっていう。下北以上なんです。島だから初めて知らない人に会った。自分が知らない人、自分を知らない人に会った。ただ、当時は小豆島から大学に行くのって1割ぐらいだったから、エリート層だからどうにかなったけど、今、やっぱり小豆島もう7割外に出るので、もう今の子たちにそんな苦労をさせられないということで、演劇教育をはじめていただいた。だから、離島とかの方がやっぱり早いんですね。

まあ、隠岐島前高校。ここはもう閉校寸前になっている。島なので、高校がなくなっちゃう。高校がないという理由でみんな外に移住しちゃうんです。子供、高校に通わせるのにすごくお金がかかってしまう。なので、何ていうか最後の切り札として全国から不登校の子たちを集めて非常にユニークな教育をすることで、逆に今ではすごく人気で、地元の子は無条件に入れるんですね。外からの子は倍率が高いので。だから、その高校に入るために家族ごと中学から移住するなんて言う家族もいるぐらい。例えば、私、実は来週、北海道の大空町という、女満別空港のある街ですが、ここは、高校は町立です。町立の高校で、ここまでで学年のうちの、今はもう4分の1を超えて3分の1ぐらいが町外から来ています。これは実は、隠岐島前高校を作った教員の一人が今、校長先生をやっているん

ですけど、そのぐらいユニークな、そこも完全アクティブラーニングですね。ほとんど授業ない高校ですけれども。そのぐらいオンリーワンのものを作ると外から来るので、ですからおっしゃるとおりで、下北は島だっていう覚悟を決めて、やっぱりよそからどうすれば若い人たちが来てくれるって。出て行くのを止めるんじゃないかって、来てくれるか。いずれ考えなきゃいけないかなと思って。

宮下市長： ありがとうございます。教育長お願いします。

阿部教育長： 幸いにしてお話を聞かせていただくのは三回目です。いつも感心するばかりなんですけれども、三つ特に興味して、皆さんにお伝えしたいことがございます。

エンパシー、そしてエンパシー、最後はマシュマロこの三つです。えっと勉強大事、学力大事、学力の七割が基礎基本、残りの三割で子供たちの人生は決まる。本当にそうだなと思って聞いてました。エンパシーというのはあの違いを認めて一緒に協力することをだそう。シンパシーが「あ、そうだよね。」って感情が一緒になって、よくわかるよ。ひとつになって助け合ったり。でも違いを認めて一緒に頑張る力というのが社会に出たら役に立つぞ。っていうふうに言われて本当にそのとおりだと思いました。最後のマシュマロは、我々の業界は固い言葉が好きなので、非認知スキルとか言ったりするんですけど、マシュマロを置いて長い時間我慢できる子供は勉強できるようになるんだそうです。これは非認知スキルで、我慢もできる子は自立、セルフコントロールして自分で勉強時間コントロールしてゲームを短くして、やっぱり最終的には力が付く。そのようなことをいっぱい聞かせていただいて、今日すごく勉強になりました。ありがとうございます。

宮下市長： エンパシーの部分は、多分演劇のところですよ。大事なところだと思います。

平田氏： そうですね。シンパシー、今ご紹介いただいて、シンパシーというのはかわいそうな人がいたらかわいそうだなあと思う心から出てくる感情です。これはとても大事なんですね。これは情操教育の部分です。

エンパシーというのは、異なる価値観とか異なる文化的な背景を持った人と、なんでそんなことしたんだろうって言うことを理解する態度や努力の能力のことを言います。例えば、学生によく説明するのは、2年ほど前にトランプ前大統領の支持者たちが国会議員乱入しましたね。ワシントンで。私たちはあの乱暴者達に全く同意できないけれども、トランプさんに投票した7000万人の白人貧困層の寂しさや悲しみについては理解に努めないといけない。そうじゃないと分断が終わらないからです。要するに同意しなくてもいいから理解に努める。おれは全然そう思わないけど、君がそう思う理由は分かるよっていうのがエンパシーなんです。このエンパシーというのは自然に出てくる感情ではないので、教育で身につけないといけない。多文化共生型の社会になる時にはこのエンパシーを育てないと社会の分断がひどくなるので、そのエンパシーを育てるのには演劇という他者を演じるのが非常に有効だというのは、ヨーロッパなどの先端的な考え方になっています。
(終わり)

宮下市長： 議論深めて良いですか。今の話ってすごく大事なポイントで、学校っていう大きな枠組みの中でいくと、どうしても同じ教室の中で同じことをして、やっぱ同じ方向を向いてなきゃダメだと。それがある意味成功するみたいな部分もあると。で、これは一方で必要だと思うんですね。それはそれであって、エンパシーみたいな今のお話もあって、

もう一つ今、学校の現場でやっぱり大変なのは特別支援だと思んですよ。特別支援って様々な子供たちがいて、様々な特性のある、あるいは特性が強い子供たちがいて、今はそのインクルーシブという形で一緒にやっつかないといけない。そういうことについては、このエンパシーという部分であるいは、今、先生が推奨している演劇というのはどういふふう役に立つかということ、ぜひ教えてください。

平田氏： いくつか答えがあるんですけども、まず、おととい中学校で授業をさせて頂いた中でも、何人かやっぱり支援の必要な子がいたんですが。ほとんど問題なく、先生方が驚かれるほどきちんと参加しました。例えばですね、これ別の小学校の例ですけど、場面寡黙という子がいて、先生もその子の声は1度も聞いたことがない。6年間。でも家ではちゃんと喋って。その子と一緒に演劇を作る授業があったんで、その子も入って演劇を作れるようになったんですが、そこはクラスの運営が普段からすごく良く、班の方が助けてあげて、最初の1時間目はちょっと台本通りにやるんですね。子供達の授業を見届けたんですけど、なんか手をあげたりとか頷いたりこう。しゃべらなくてもやれる役をやって。2時間目は自分たちが台本作るんですけど、その転校生がやってくるっていう元のストーリーがあるんですけど、大胆にも2時間目はその場面緘黙の子を転校生役にしたんです。ほぼ主役にしたわけです。シャイな転校生っていう役にして、先生にこそこそこしてやると先生が全部しゃべってくれる。で劇としては全然問題ないわけですよ。その子も本当に終わったあと笑顔で。普段だったら発表とかほとんどこれまで出来なかった。学力は問題ないけど、発表とかができなかった子がちゃんと発表に参加できた。そう

いう場所を活かす、しかもこれはその子のことだけではなくて、やっぱり周りの子にとってすごく良い経験だったとさっき言ったように、その子をどう生かしていくかと言うことを考えざるをえなくなった。

僕はこれがね。公立の小学校、中学校の圧倒的な強みだと思う。東京の私立の中高一貫校では絶対にできないことです。偏差値で輪切りにされたと同じような子しか集まらない。でも、公立はそういう弱い子たちがいて、その弱い子達をどうやって包摂して行くか、どうやって生かして行くかということ全員で考えなきゃいけないですね。これからの日本社会で一番大事なことなので、そういうことをきちんと学ぶということで、何かマイナスの要素ではなくて、マイナスの要素でもその子もいることによってクラス全体がより学びが深まるっていうような教育にして、先生は本当に大変だと思うんですよ。今、本当にいろんな子がいるので。そこをどうにかですね強みにしていただけるといいなと思います。

宮下市長： ありがとうございます。最後私からなんですけども、3点あります。一つずつお伺いしたいんですが、まず、演劇を活用した授業をするアクティブラーニングとして学校教育の中でやられてるというふうに思います。それを先進的に先生の方でやっていただけると、私自身は学校教育のあり方に高い問題意識を持っていて、どっちかっていうと、今のようですねチョークアンドトーク、教科書を開いて学習指導要領を先生が教科書どおり教えることは、極力減らした方が良いでしょう。学習は個別最適化された中で一人一人がやれば良い。それが実はもう本当に常にアクティブラーニングをやっているというふうなことが必要だと思っています。学校のそういった時間の使い方について、先生はそのトータルでどのようにお考えでしょうか？

平田氏： もうおっしゃる通りですね。今、知識や情報はどこでもそれを。例えば講演会の話なんですけど、知識や情報はどこにいても、家でも手に入れることができるんですね。よく皆さんの反転授業で起きたことあると思うんです。市長もそれを意識されてると思うんですけど反転授業というのはコンピュータやインターネットできちんと予習をして、学校ではディスカッション型アクティブラーニングの授業にしますよっていう。これ何が反転したかっていうのをちゃんと押さえておく必要がある。反転したのは、教員や学校が持っていた権利、権力の源泉が判定したんです。今までは、知識や情報を教員が抱えこんでいたから、それを得るためには子供たちが学校に行かざるを得なかった。だけど、今はそんなものは全部、家でもどこでも手に入れることができるんですね。しかもこれがコロナでばれてしまいましたよね。あの全国一斉休校措置のときに子供たちはこんなだったら学校行かなくていいじゃんと思って。あるいはもっと先生方に厳しい言い方をするのなら、こんな授業ならば学校行かなくていいじゃんと思った。さっき言ったチョーク1本で教え込む授業、それでうまい先生もいらっしゃるんですけど、実際には、でもやっぱりこんな授業なら学校じゃなくてオンラインでもいいじゃんと思ったと。でも本当は違いますよね。学校にしかできないことがある。学校しか出来ないのは主体性や協働性や多様性を育むこと。これは学校でしかできないオンラインではほとんどできないこと。その学校でしかできない、新しいことをやるという僕は、学校でしかできないことを取り戻すっていうことなんだと思うんです。本当は学校でしかできないことというのがあって、それを取り戻すためのICT化。オンラインでできることは全部オンラインにしましょう。学校では学校でしかできないことをします。それは、一緒に学んだり一緒に遊んだりすること。その

切り分けが大きなポイントになる。

宮下市長： ありがとうございます。2点目なんですけども、今日全体でいろいろなお話をお伺いして、今のお話もそうですし先ほどのそのエンパシーの話もそうなんですけど、学校現場にも様々な御示唆に富むお話をしていただいたと思うんですね。ところが、今日来ていただいている先生方もそうでないと信じておりますが、仮にこういう話をしてでもですね、学校現場っていうのは、どうも違うことだというふうに捉えるんですね。それが違うと自分とは現場はこうだからそんなことは出来ないっていうふうにならざるを得ないというふうな傾向にある。そういうふうな学校の今までの何ですかね、DNAとかプログラムされちゃって、そこを変えるためにはどういうふうにして私達その教育委員会があるいは市長がすべきかそういうことについてご助言いただけますでしょうか

平田氏： そうですね、これはちょっと大きな話になってしまいうんですが、今日、先生方もそうなんですけど、保護者も同じで、どうしても教育って自分の受けてきた教育をスタンダードとして考えてしまう傾向があるので、まず、大学入試様変わりです。今、半分の子は年内入試と呼ばれる推薦入試、AO入試で入ります。推薦入試やAO入試、最低でも面接、今はほとんどが集団面接やグループディスカッションになっています。どうしてもコミュニケーション能力が問われます。それから高校時代に何をやってきたかとか、どういう地域貢献をしてきたかとかが問われます。もう、大学入試が大きく変わっていて、しかもですね、AO入試が一芸入試なんて言われたのは20年前の話で、例えば慶応大学なんかは、AOで入る子が一番大学に入ってから成績がいいんですよ。今先進的な大学はほとんどこのAO推薦でトップクラスをもまず囲い込み

ます。もうそういう時代になってるんですね。ところが地方はまだ情報が行き渡っていないので、地方の進学校の進路指導の先生ほどいまだに1、2月、共通テストを受けて一般入試で入るのが王道だと、地元の大学に入るのが王道だというふうに、未だに思われてるんです。そこをまず変えなきゃいけない。そこが変われば、だんだんと風下が、川下が変わっていきます。要するに、求められている能力が大きく変わってきている以上、学校も変わっていかなくちゃいけないんです。

もう一つはですね、さっき言った権力の牽制が反転したということが、まだなかなか受け入れられない。先生方は、知識や情報が特に初等教育では圧倒的に生徒に持っていますから、教える方が楽なんですよね。教える間は継続性が保てるんです。でも、今、私達が言う表現教育とかコミュニケーション教育の子供たちの側から表現が出てくるのを待つ勇気が必要なんですけど、これやっぱり自信のない先生ほど待てないです。教える方が楽だから。ここを変えなきゃいけないんです。

実際、例えば、私が今住んでいる豊岡市は市内34の全ての小・中学校で演劇が導入されています。これには担任の先生がいます。もちろん子供たちのためなんですけど、特に豊岡市教委が狙ったのは、中学校は総合的な学習に使える単純なところやらなくちゃいけない。そうすると、この演劇的効果を使った教育をやることによって、音楽の先生も社会科の先生も自分の授業をアクティブラーニング化する意識改革のきっかけにもなるだろうという、今、どの地域でもそうですけど若い先生が多いわけですよね。若い先生はそんなに先入観がないので、若いうちにこういうものをたくさんやらせよう、やっぱり先生方はそうは言っても子供大好きなんで、子供が笑顔になれば変わるんですよ。やっぱり先生方にも変わってもらおうような、これ鶏が先か卵が先かなんですけど、授業作りっていうのも

のを、教育委員会全体でやっぱりカリキュラムを作っていくってことも大事なんだな。

宮下市長： ありがとうございます。あの先生の代行として教育長から一言。

阿部教育長： はい。代表に値するかどうかは別にして、一つお伝えしたいことがあるんですが、演劇教育作ることの一つが、答えがないことだと思う。答えがないっていうのをやってみましたけど、日本のテストって、さんかくにはいくら。イギリスのテストっていうのは、5はまるばつさんかく、好きな数字を入れて。答えがいっぱいありますよね。こんなふうにして、答えが一つではなかったり、あるいはたくさんある。あるいは、測る物差しが一つではない。例えば演劇だが、ストーリーを作って演技をして、それをストーリーが良かった、あるいは縁起が良かった、あるいは個性がすごい光っていた。そんなふうにして、いろいろ見る視点によって評価は様々でそれが許される。そうしたところは素晴らしいなって思っています。そして問いに対する答えなんですけれども、我々はいろんなものを学んで、現場でよく言われた言葉が「子供とともに学ぶ教師」というように言われました。今こそまさに時代が変わっているんで、大学入試だけではなくて、社会も変わっています。子供と一緒に我々教職員が変わらなければならない時期であることは痛切に感じていますので、我々はそこから逃げずに向かっていかなければならない。そんなふう考えてます。

宮下市長： ありがとうございます。それから最後、私から3点目ですけれども、今むつ市ではですね、中学校の地域部活動の地域クラブへの移行というのが教育委員会で行っています。これはそもそも中学校の部活動が義

務で、全員入れなきゃいけないと。そして学校によってはもう1個か2個しか選べない中で、強制的に入ってるっていうそういう事情もありますし、また少子化が進んでるので、活動そのものの維持ができなくなるということがまず改革の背景にあります。ただ今日、平田先生のお話を今日来ていただいている学校関係者の皆さんや市民の皆さんも聞いていただいたと思うんですが、なぜ私達がですね、文化に取り組んでいるのか。そして、なぜ学校からその切り離すということで取り組んでいるのか。そして私達が何を子供たちに期待をして、何を提供してしようとしているのかということがおそらくこうも聞いていただければですね、大体その結論的なところはわかっていたというふうに思うんです。大事なのは子供を子供と思わないで、やっぱり私達としては子供を1人の市民として見ると、ある意味大人として大人として見るというよりは、大切な市民として見ていると。そういう中でやっぱり文化によるその社会包摂という、先ほど言葉がありましたけれども、それをどう実現するのか、そして、スポーツによる社会包摂っていうのもあると思います。これをどう実現するのかということが大事で、今は中学校から始めますけど将来的には統合型の文化スポーツクラブになりますから、大人から小学生までがやっぱり参加するクラブに進化を何年かすれば出てくるんですね。ですから、関わりのない人が誰もいない取り組みに、どんどんなっていくということでありますので、ぜひ、多分この取り組みにもですね、ご指導いただければと思います。一言コメントいただければと思います。

平田氏： まず、いろんな文化団体の方がこういう施設を使われていると思うんですけれども、よくホールの新設なんかの手伝いしますね。文化団体の方がいろんな希望を持って、こういうふうな施設にしてくれみたいに言うんで

すけど、その公民館と芸術施設は違うので、要するにテレビの言葉ではないけれども、皆さん行政が皆さんに何かをしてくれるかではなくて、文化団体の皆さんがこれまでの蓄積を行政を通じてどう子供たちに還元できるかがこれからの文化団体の役割ですよということをよく申し上げて、まさに今市長おっしゃられたような、地域で一体型でいろんなメニューが用意されてるっていうことが理想形になって。

ちょっと遠回りの説明なんですけど、早生まれ問題ってのをお聞きになったことある方いると思うんですけど、Jリーガーとか、プロ野球選手は早生まれが極端に少ないんです。これは日本と韓国だけなんで、要するに学校スポーツがあまりに強くて学年ごとにレギュラーを競うから、早めの早い段階で先発からプレーをされちゃう。ただですね、どんな教育学者に聞いても、高校ぐらいで早生まれまでの格差は解消されるはずだと。だって私達大人は、1歳2歳の年齢の違いなんて全く関係ないじゃないですか。大体もう高校ぐらいに回収されるんですね。

Jリーグはすごく頭がいいんで、13歳ぐらいから早生まれだけの先発チームっていうのを作ってる。その中でレギュラー競うそうなんですけど、これも多くの教育学者が言うことなんですけど、知力や体力は高校時代ぐらいで、ほぼ追いつくと、問題ない。だけど、今日話題になった非認知スキルですね、これは幼稚園保育園から小学校低学年が一番伸びると言われている。ここで差がついちゃう可能性がある。僕はそれに言葉を与える仕事なんでこういうふうの説明するんですけど、早生まれの子は幼稚園保育園でおままごとをやるときに子供の役しかやらせてもらえないんです。小っちゃいから。昔は今日説明した地域社会があったので、地域社会では、学年単位ではないから早生まれの場合も、お母さん役やるチャンスがあったんですよ。今、保育園

幼稚園でも全部学年で輪切りにして、しかも少子化だから7、8人だから本当にお母さん役の子をずっとお母さん役について離さないですからね。7年1回。役割が固定しちゃうんです。なので、一つは学校教育の中にそういうのを取り入れて、意図的に役割をシャッフルしなきゃいけないということと、もう一つは地域社会を取り戻して、学年を超えた交流とかを作っていく。この二つが大事なんじゃないかなと思います。

ちょっと全くの余談ですが、東京の開成とか、灘とか早生まれがないクラスが、これは実は学力の差じゃないんです。計画出産です。開成では今4割一人っ子なんです。東京だと開成に入れるために500万円かかるんで、1人しか産めないんで、普通の中産階級でほとんどが30代で、富裕層の母親はほとんど計画出産です。当然、5月6月に産むようにして。もうSFの世界です。ちょっとむつ市の方には想像できない、SFの世界ですね。

これ僕だけが気がついたことなんですけど、2年前に全国一斉休校措置のときに、あの2週間ぐらいだけ9月入学が真剣に議論されたじゃないですか。全国知事会で。あのときに4月5月6月生まれのお母さんたち焦ったと思うんですよ。計画出産でわざわざ4月5月に産んだのに。あのお母さんたちが旦那さんの政治家とか経済人を使って阻止された。そのぐらいに本当になんていうかな、本来は子供たちが持っている縦走性とか、地域社会との結びつきが壊れちゃうと、学校だけではどうしようもできないことがたくさんあるので、地域の力を取り戻すってことが大事。そのための総合教育会議ね。

宮下市長： ありがとうございます。もう、本当に私はクリアになりました。会場の皆さんもおそらくご質問等あると思いますので、司会の方に。

事務局： それでは会場の皆様から質疑等賜りたいと思います。時間の関係上、2人程度とさせていただきます。なお発言の際はお名前お聞かせください。それでは質疑等のある方は挙手をお願いします。はい、どうぞ。

市民の方： どうもありがとうございます。私、むつ市の社会教育委員をしております。よろしくをお願いします。

質疑ではないんですけども、先ほどの奈義町ですか。子供歌舞伎の関係が出ました。しかも陸上自衛隊さんがいて。その関係なんですけど、むつ市にも自衛隊がありまして、結局なんかすごく共通性があるね、むつ市も同じだったと思ってね。むつ市はあの、子供歌舞伎だけじゃなくて、ほとんどの中で大人の歌舞伎を成長させた中で、これから子供も必要だってことでね、当然静かに育った歌舞伎なんですね。ですから、もし、また先生がどこかで講演するようになったら、このむつ市ことを話していただければいいなと思ひまして。意見ではないんですけども、よろしくお願ひいたします。

平田氏： 奈義町も元々農村歌舞伎は大人の歌舞伎が非常に盛んです。小豆島もそうなんですけど、歌舞伎守ってきてそれを子供にもさせようということ。あと、もう一つやっぱりきちっと伝統芸能とかをきちんと落とし込んでいくところだけがやっぱり成功してます。

小豆島ですね、面白くて。町役場の中に演劇推進室っていうのがあって、市役所職員最初の3年目ぐらいまでは農村歌舞伎に出ないといけない。その代わり、もう5時5時半であがって良いよと。その方が、外から入る人もいる。とにかく町民と早く結びつくために、もう強制的に歌舞伎出すんですね。それから、奈義町は非常にコンパクトなまちなので、ちょっと政策がやりやすいってところもあって、広くないので、全部集約されてるの

で、その子供たちも通いやすいということがあって習い事とかも全部ただにしてるんですが、奈義町の偉かったところは、やっぱり20年ほど前に市町村合併の話があったんですけど大きな町です。津山市に飲み込まれたんですが、市町村合併、選ばなかった町なんですね。それはもちろん税収が減ったからってことがあるんですけどその住民投票のときにあの町役場の職員が、市町村合併のメリットとデメリット全部細かく書き出して、町民全員にやっぱり投票してもらったわけです。そこで市町村合併しない。その代わり、町議会の議員の数の定数を減らすし、いろんな削減をして、自衛隊から出る税収はできる限り高齢者よりも、教育や子育てに充てようということ全体をコンセンサスとして決めた町なんです。そこはやっぱり覚悟ができてるっていうところ。やっぱりそういう北海道の東川町というのもそうなんですけど、ここは旭川の隣。やっぱり旭川からどんどん移住してるんですけど、家具の町なので、日本中から家具で若いデザイナーとかが集まってきて、1950年の人口1万人をピークに90年代には6000人台にまで減ったんですけど、今8000人台に回復しています。小さな町で先ほどベッドタウンだと、それベッドタウンだけではなく、やっぱりそこで広い意味でのアートとか文化とかセンスの良さで若者を引きつける街は、人口減少が止まりつつあるというのは、実際にある。

宮下市長： むつ市もですね、むつ市職員は3年目までおしま流し踊りに出ているんです。同じように。

平田氏： 素晴らしい。素晴らしい。

宮下市長： 先生の話の聞くと、どっちかっていうと高校生にね、やっぱりそういうのに参加しそうですね。

平田氏： そうですね、高校時代に地域の行事とかに参加してる方が確実にUターン率が上がってデータは出ています。

事務局： どうもありがとうございました。それでは、予定の時刻となりましたので、質疑応答合わせていただきます。宮下市長お願いします。

宮下市長： はい。本当、今日は多岐にわたる議論もできて有意義な時間を過ごさせていただきました。最後になりますけれども平田先生から一言いただけないでしょうか。

平田氏： 実は八戸東高校にも20年間毎年通ってきておまして、途中からそれを聞きつけた横浜町前教育長がその前後に来いってということで、毎年授業が終わると拉致されて横浜に来てたんですが、そのうちに周りのむつ市とかにも読んでいただくようになってご縁ができました。皆さん、でもそうは言っても誰が教えるのとかって思われるかもしれませんが、実は大湊高校ですかね。文化庁にちょっと申請をしていただいて、ちょっと演劇を取り入れようということでこれ通ってですね、うちの劇団員でたまたま青森県弘前出身の女優ですごく劇中のプロが1人いましてですね、彼女が来ることになっておりますのでちょっとその前後でまた中学校とか教えに行くとかっていうこともできますので。今ですねそんなに地域の不利さっていうのはないんですよ、実際は皆さんがやっぱり覚悟を決めてやろうってなったらですね、相当センター的な教育ができる。今日大学も見せていただいて、やっぱりびっくりしたんですけど、うちの大学もそうなんです、地域に大学が出来上がって、うちの大学も5年前まで誰も信じてくれませんでした。県立の大学でも、県知事と前市長は私しか信じてなかった。でも、やっぱりやればできるじゃないですか。今それでね、ICTとかも発達してるので、それをうまく組み合わせれば地域のハンディがすごく少なくなって、やっぱり諦めちゃ駄目だと思うんですよ。私達から上の世

代が、ゆえに逃げ切り世代と言われてる人間たちが、もう地域は変わらなくていいと。よそから人が作るの面倒くさいとかって思うのは、しょうがないとかあると思うんですね。だけど、円安とか言ってもね日本で暮らしても関係ないし、安くて安心安全で清潔だから日本が住みやすいし、でもその変わらない地域が変わらなくていいという気持ちが若い人にも伝わって、この町は変わらない。もし変わるとしたらそれは私が、自分がこの町を出ていくしかないっていうふうに思ってしまうところから地域の衰退が始まる。ぜひやっぱりですね、子供たち若者たちに変わるかもしれない。という夢が描けるようなやっぱり教育政策や文化政策をしていただくといいかなと思います。今日はありがとうございました。

宮下市長： ありがとうございました。先生もし文化庁が決まりましたら、むつ市の方でしっかりと合わせたいと話しました。一つの方法だけでなく三つの方法で取り組みとかにさせていただいた方が、今日の出会いの話と言ってもいいかなというふうに思いますし、ぜひそういう意味では何とか実現していただければと思っています。

改めて、最後になりますけれども平田オリザ先生の皆様から盛大な拍手をお願いします。

事務局： 本日の協議内容については要点をまとめた上で、むつ市公式ホームページへ掲載することにより、公表することといたしますので、ご了承願います。本日はありがとうございました。気をつけてお帰り下さい。

(おわり)